

こんにちは。京都大学 iPS 細胞研究所の上廣倫理研究部門で特定研究員をしております、澤井と申します。まず簡単な自己紹介ですが、もともと宗教学を専攻しておりましたが、海外に留学した際に哲学や生命倫理学のトレーニングを受け、今はもっぱら、生命倫理を研究しております。最近の研究成果として、来週、京都大学学術出版会から、単著（『ヒト iPS 細胞研究と倫理』）を出させていただきます。また、私が所属しております部門の取り組みとして、iPS 細胞研究に関する倫理的問題に関して、実証的な意識調査を行っております。先月、*Regenerative Medicine* という英国のジャーナルに論文が掲載されました。内容ですが、現在、国内外で研究が行われている、iPS 細胞を用いて動物の体の中で人の臓器を作る研究に関して、日本の一般市民と iPS 細胞研究所の研究者に対して意識調査をいたしました。

本日は、私が編集委員長をしております、『いのちの未来』という紀要論文集のお話をいたします。表紙はこのようになっています。英語の表紙もございます。簡単に書誌情報をご紹介しますと、カール・ベッカー研究室紀要として出しております。ベッカー先生は、現在、こちらの未来研究センターにおられますが、兼任というかたちで人間・環境学研究科におられます。ベッカー研究室は後者の人間・環境学研究科にございますので、発行所は人間・環境学研究科、共生人間学専攻、カール・ベッカー研究室としております。すごく若い紀要で、去年（2016年1月）初めて刊行させていただきました。

先日、設楽先生からぜひ発表をと声をかけていただきました。ただ、正直なところ、私はここで話をするようなことはほとんどないと思っております。かろうじて皆さんにお伝えできるのは、ごく最近、この紀要を私が中心となって刊行したということで、私自身も、この紀要も持っている、無から有を生み出した熱ではないかなと思っております。そこで本日は、あくまでも事例報告というかたちで、『いのちの未来』という紀要論文集についてご紹介させていただきます。お話をいただいてから、京大の「紀要」をいろいろ拝見しましたが、私たちの研究室紀要は、必ずしも紀要のスタンダードではないように思いますので、あくまで一つの事例という認識でおります。また、昨年1月に刊行し、本年も2月に刊行することができたのですが、言うまでもなく若いジャーナルですので、私自身、皆さんからいろいろ教えていただきたいと思っております。

本日お話しする内容は、われわれが紀要を、なぜ、またどのようなプロセスで創刊したのかということです。創刊の話もそうですが、本年刊行いたしました第2号の話もしようと思っております。併せて、これまで論文集を刊行する上で、どのような点に苦労したのかという点、また今後、第3号を出す際に、どのような点で苦労しそうかという点についてもお話いたします。

まず、なぜこの紀要を創刊する必要があったのかという点です。これはすごく実践的な理由でして、私は現在、研究員のポストに就いております。その当時（2014年以前）は院生だったわけですが、院生間で業績の場を作りたいと考えたのがそもそもの起りです。ベッカー先生は生や死に関する様々な問題に取り組んでおられますが、同様に院生も大なり小なりそのような問題に関心を持ち、様々な角度からアプローチしております。院生個々人の研究関心が

すごく多岐にわたっているという点が、一方では良い面なのですが、他方では院生の中にはディシプリンが定まらないというようなことも起こります。研究内容や研究方法について、院生間で話し合ったり、OBの方と話し合ったりしております、どこかに論文を投稿する場が欲しいということになりました。そもそもの起こりはそのようなところでした。

院生の中には、自分の関心のある分野で、他研究科の先生にも指導を仰ぎに行ったりするようなことはあったのですが、やはり研究室が中心の院生が多かったということがございまして、研究室内で研究の作法を学ぶ場と位置付けて、紀要を作りたいと考えた次第です。そこで、それぞれ関心はあるものの、それに対してどうアプローチすればよいのかを知ることができたり、研究分野が明確に定まっていない院生が、同じようなジレンマを抱えてキャリアアップしたOBやOGから指導を受けることができたらいということ、研究室のOB・OGに相談いたしました。そうすると、すごく好意的に受け取ってくださり、やるからには質の高いものを刊行しようということで、始動いたしました。

次に、どのようなプロセスを経て、『いのちの未来』を刊行したのかという点です。まず2013年7月、紀要を作ろうと本格始動いたしました。実際に話し合いを始めてからは思いの外、スムーズに進んだのですが、まずは体制の整備をいたしました。そして、同年の年末に、投稿の締め切りを設定いたしました。2014年から2015年の間は、査読期間2年と書いておりますが、本来であれば、2014年度内には創刊号を刊行したかったというのが正直なところでした。しかし、査読をOBやOGにお願いしたのですが、出すなら質の高いものを出そうということで、査読が予想以上に長引いてしまったというのが理由の一つです。別の理由として、実質手を動かしていた編集委員が（博論提出や就職などで）忙しくなり、延び延びになったということもございます。

2016年の1月に創刊号を刊行することができました。そして、本年2月には、第2号を刊行しております。第2号ですが、ベッカー先生が本年3月に退職されるということでしたので、2016年に創刊号を出してすぐに、第2号は退職記念号という位置づけで刊行しようと企画いたしました。そういった経緯もあり、2016年の末に締め切りを設けています。具体的なことは後でもう少し述べますが、退職記念号と位置づけましたが、ベッカー先生が4月以降も京大に残られるということで、退職記念号という位置づけは取りやめ、ただ最終講義に合わせる形で刊行することにした次第です。

それでは、紀要のコンテンツや掲載の状況について少しご説明いたします。投稿の区分は大まかに四つ、原著論文、研究ノート、依頼論文、翻訳論文を設定しております（大まかというのはほかにもいろいろ柔軟に対応していこうということでございます）。創刊号では、査読の結果、掲載に至らなかった論文がいくつかございます。そのため、原著論文2本、研究ノート2本、依頼論文5本（そのうち英語論文が3本、日本語論文が2本）、翻訳1本となっております。第2号は先ほど申しましたように、（当初、ベッカー先生の退職記念号と位置づけ）2月の最終講義に合わせて刊行するには査読の時間がなく、全て依頼論文という形を取りました。依頼論文の内訳ですが、英語論文2本、日本語論文6本となっております。これまでに掲載された論

文の分野としては、先ほど研究関心が多岐にわたると申しましたが、哲学、倫理学、社会学、主に医療社会学、死生学、看護学等々になっております。

ところで、私は創刊時には知らなかったのですが、京大学術情報リポジトリ KURENAI の「アクセス統計詳細」でアクセス数を確認することができます。当初、大してアクセス数はないかなと思っておりましたが、論文によっては、一月に 200 件近くのダウンロードがあります。これが多いのか少ないのかというのは分かりませんが、個人的には意外に多いという印象を持っております。

次に、創刊号、第 2 号の刊行に際して苦労した点です。ここに書いておりますように、苦労した点は、具体的に私が担った作業でございます。と言うのは、私を中心に、3 名でほぼ全ての作業を行ったということもありまして、本当に苦労いたしました。まず、紀要の創刊に際しては、体制の整備をする必要がございました。具体的には、編集委員会を立ち上げ、その過程で指導教員や OB・OG になっていただいている顧問と具体的な話を詰めました。また、投稿規定を作成したり、査読の依頼なども行ったりいたしました。査読の依頼に際しては、委嘱の手続きもいたしました。創刊号については、投稿者と査読者のやり取りが結構煩雑で、査読が割れた際の調整作業が、すごくややこしかったと記憶しております。また投稿募集時には、できるだけ多くの院生、若手中堅の研究者から寄稿していただきたかったということもございまして、研究室のメーリングリストでアナウンスするだけではなく、私の方から（特に、海外の若手研究者に対しては）個別に依頼いたしました。図書館の方とのやり取りもございました。リポジトリの登録、覚書の締結、刊行後のデータ送付などです。あとフォーマットなどの体裁は、執筆者にお願いしようかと考えておりましたが、依頼論文についてはこちらからお願いして寄稿していただきましたので、編集委員の方で修正いたしました。

先ほども申しましたように、ベッカー先生の退官に伴い、2017 年 4 月から「ベッカー研究室」はなくなります。そのため、今後、紀要を継続するとしても、これまでの位置づけで紀要を継続することはできないと思っております。継続したい、また継続してもらいたいと言っているだけでありますので、もし継続するのであれば、今後、なぜ継続する必要があるのかということを考えておく必要はあると思っております。現時点で、「研究室紀要」ではなく、「研究会紀要」という形で再始動してはどうかという案が出ております。詳細については、第 1 回の研究会を開催し、今後の予定について話し合っはどうかということになっております。そこでやはり考えておきたいのは、なぜ紀要を継続する必要があるのかということです。つまり、誰が、何を目的に投稿する雑誌として、「紀要」を位置づけるのかという点です。

今後、継続することになれば、苦労すると思われる点がいくつかございます。一つは、投稿希望者をどう募るのかということです。そもそも、われわれの紀要は、院生の業績作りの場を作りたいという理由で立ち上げましたので、もうそこに依存しなくてもよい（私も含めた）若手研究者が、どうして紀要に投稿しなければならないのかという点については考えなければなりません。

また、査読制や編集体制についてもこのままでよいのかと思っております。外注できるので

あれば外注したいと思っておりますが、外注する場合、費用をどこから捻出するのかという問題もございます。

これが最後のスライドでございます。「今後の発展のために」ということで、私たちの紀要もそうですが、いわゆる紀要論文集のようなものを継続していくためには、大学のサポートも必要であるように思っております。神谷先生から大学のサポート体制についてお話しただけということで、大学のサポートがあるということを知れただけでも良かったと思っております。また、今後そのようなサポート体制が拡充していくのであれば、それはすごく良いことだと思っております。

ただ、われわれも考えなければいけないのが、繰り返しになりますが、紀要をどう位置づけるのか（なぜ紀要を刊行しなければならないのか）ということです。

最後に、編集紀要ネットワークというのは、立ち上げから今まで中心に取り組んできた者として、すごく良い取り組みだなと思っております。正直、何もわからない状況から紀要を創刊したということもあり、どこから手を付けてよいのか分からなかったということもございます。そういう意味では、紀要編集ネットワークのようなネットワークがあれば、今後もし紀要を創刊する方とか、継続を悩んでおられる方や、色んな方が、横のつながりを通して、得るものもあるのではないかと思っております。

ご清聴ありがとうございました。